順天堂史

佐藤進伝 (4)

A Biography of Susum SATO (4)

小川鼎三*

TEIZO OGAWA, M.D.

順天堂医院の新築成る

日清、日露の戦役をへて、日本の国運は大いに揚った。陸軍軍医総監としてこれらの戦争で大いに働き、大韓医院の建設に尽した進が明治40年に男爵を授けられたのも、当然といえる。その前に一族の松本順(泰然の次男)は男爵となり(明治38年)、林薫(泰然の末子)は外交官として日英同盟の締結、その他の功績により、伯爵となっていた(明治39年)。

日本の首都東京は大きく変貌していた。市街が整理され、電車が通じた。神田の駿河台と本郷の湯島台を結ぶお茶の水橋は明治22年の東京府公報に「御茶の水新架橋」の名称がみえるので、そのころできたものと思われる。それまでは水道橋と昌平橋のあいだに深い崖の神田川(仙台堀、文人墨客により茗溪ともよばれた)には橋がなくて、順天堂医院もかなり不便な場所であった。もっとも文京区史第3巻(昭和43年)の第133ページにお茶の水橋の題で、明治7年4月28日付の某誌に「これまで万世橋と水道橋との間がはなれていて舟車の便が悪かったが、その中央駿河台と桜馬場との間に橋をかけ往來の便をよくしようとして、れれぞれの3名が協議して府庁へ架橋のことを出願し許可された」とある。これは通行諸人から渡橋銭をとる有料橋の計画であったというので、もしそれが実行されたとしてもいくらか便利というにすぎないだろう。

本格的なお茶の水橋が明治22年ごろ架けられ、2年後の24年にはニコライ堂(日本ハリストス正教会の本部)ができて、すぐれたお茶の水の風景が初めて生れた。明治8年に佐藤尚中が建てた順天堂も古くなり、病院の機能の上からも改築の要に迫られた。その改築がはじまったのは、明治35年4月であり、委員長は佐藤恒久(進の養子で、順天堂医院の眼科と婦人科の主任)であった。恒久は松下伸久の4男で帝国大学医科大学を明治19年に卒業し、直ちにドイツに留学、明治24年に帰国して、順天堂の眼科と婦人科を受持っていた。新築の工事長は工学士真水英夫、会計主任は大野伝兵衛であった。

その第1期工事として、木骨モルタル外装の新築病棟が明治36年4月にでき上り、5月から患者を収容したが、その後本館の建設は日露戦争のため進が軍務に就いた関係もあり、だいぶ遅れて、本館の新築落成は戦後の明治39年11月であった。上述した進の滞日日記すなわち明治37年に広島滞在中に認めた日記の中にある手術場の設計にかかわる進と大野伝兵衛との手紙やりとりの件は、進が従軍中も本館の設計に腐心していたことがわかる。

神田川の崖に向って玄関をもつ本館は2階建てだが輪奐の美を誇り、お茶の水の景観をいっそう添えた。建設委員長の佐藤恒久は竣工後3カ月の明治40年2月に病歿している。明治43年にも病棟の増築が成されて、このとき総建坪2908坪余、病室152、ベット数271となっている。

前述の大韓医院が京城にでき上ったのは明治41年の秋で、進はその初代院長となったが、間もなく辞して帰京した。その年11月下旬に順天堂の本

* 順天堂大学医学部客員教授(医史学)
Professor of Medical History, Juntendo
University, School of Medicine.
〔Nov., 22, 1974 受付〕

館前の広場に初代泰然、第2代尚中、第3代進の3人の銅像ができて除幕式が挙行されたことが注目される。いずれもブロンズ製の胸像であった。当時の日本では偉い人物の銅像をつくるのが流行していた。本館の玄関に向って右手に佐藤家3代の銅像が並ぶのは筆者が学生時代に深い印象をうけた。

『水戸義公伝』の編著出版

明治24年に東京の巣鴨町元駒込230番地に作られた進の広大な邸宅は、彼の社会的地位にふさわしいものであった。親戚や知人を集めての園遊会がその庭園でしばしば催されたのである。そこは山手線駒込駅のすぐ北に接し、後に都電車庫のあった所である。また茨城県の麻生の旧城趾に3000余坪の地を買い別邸をもうけて、功成り名遂げたあとの晩年を送る場所とした。

自伝(谷紀三郎編、大正3年発行)には「余が始めて麻生城趾を別墅と定めしは明治36年の事にありき。今は亡き人の数の入りし患息昇が病を養はしむる為めに、何処か閑静なる地をトして休養せしめんとせしに因れるなり……」とあり、息子の昇が病身のゆえに休養の地を求めたのが動機であったという。そして明治36年の初めに麻生出身の老僕某を伴なって、進が自らその地にでかけて、やっとその場所を探しあてたとある。その土地の買収には同地の野川氏らの特別な斡旋を得たのであった。この別邸は後に女子美術大学の寮として永く保存された。そこは老松が鬱蒼としてそびえ、霞カ浦を眺める丘の山にあり、庭園の一部は梅林となっていた。

進には医学、ことに外科に関する著書や論文が多くあるが、医学以外のものでは明治44年に博文館からだされた『水戸義公伝』が特に注目に値する。江戸時代初期の名君として知られた水戸徳川家の第2代光圀の詳しい伝記である。本文301ページ、義公年譜5ページ、それに多数の付図(主として写真)があり、豪華版である。

この本の自序を進が達筆な漢文で書いている。それには進が生れて少年時代をすごした常陸太田

は光圀が隠居した西山荘のある土地なので、幼い時から光圀のことをしばしば聞き、その場所を見たりして欽仰の念に堪えなかった。そこで「公の伝を修めんと欲し、資料を蒐輯し、稿已に緒に就く。而してたまたまの日露之役あり、余また軍に従う、公務に執掌、寧処に違あらず。頃日やや間を得て、息を霞浦別墅に游し、旧稿を重訂し、題して水戸義公伝と曰う……」とあり、すでに日露戦争の前に、その稿が一応できていたことがわかる。そして自序の終りに「明治43年仲秋霞浦別墅に於て書す。茶崖佐藤進」とある。

進は明治42年ごろから順天堂の運営を養子の佐藤達次郎にまかせて、自らは麻生の別邸に多く住み、悠々自適の生活を送ったというが、まずこの本を世に出すことは、霞カ浦畔での大きな仕事であったとおもう。巻頭をかざる公爵徳川慶喜の「文徳武功」の4字はみごとな筆蹟であり、明治36年2月付である。第15代將軍の慶喜は水戸藩主徳川斉昭(烈公)の子であり、進の『水戸義公伝』のために喜んでこれを書いたと推察する。また進の義公伝草稿が明治36年に、一応できていたことも暗示されるのである。なお何年のことか進が順天堂の医員数名をつれて静岡にでかけて、慶喜公夫人の乳癌の手術を実施したことも進の自伝の中にある。その治療が済んで進が帰京するとき慶喜公に揮毫を乞うたところ、直ちに快諾して書いてくれたとあるが、それがこの4字の書であるかも知れない。もしそうだとすれば慶喜夫人の乳癌手術は明治36年の初めと考えられる。

筆者はこの『水戸義公伝』を読んで初めて徳川光圀の文武両道、また国政、藩政、『大日本史』編纂における大きい功績を知った。筆者が特に感銘を深くしたのは第5章識見、第6章尊王などであるが、ここに贅言しない。近ごろ歴史学者の伊東多三郎氏が光圀の業績を次のごとくまとめている(円カッコ内は筆者付記)。

「光圀は(水戸徳川)初代頼房の藩制開始の業を受継ぎ、自ら学問を修め、学者を招聘して“大日本史”の編纂、古典の蒐集・校訂を行い、また国内の新設寺院の整理、淫祠の廃止、由緒ある社

寺の復興などによって宗教制度を正しくした。さらに民政では勸農のため種々の制度を実施して、藩制の基礎の安定に努めた。藩士の規律・士風の高揚をも計った。水戸藩の精神と藩風、とくに水戸学はこの時に定まった。とくに彰考館を設立して“大日本史”の編纂を開始し、大義名分を明らかにした事績は江戸時代の学問思想史上、精彩を放つものである。なお光圀は寛永5年(1628)の生れ、元禄13年(1700)の歿、享年73才である。元禄4年からの約10年間、太田の西山荘に隠棲した。進が『水戸義公伝』の著述に力を尽したのは彼の郷土愛の関係もあるが光圀の人柄につよく傾倒していたためとおもう。光圀の事績がいわゆる水戸黄門の名で稗史小説の数で往々に誇張されたり、面白半分に書かれているので、できるだけ多くの資料を漁って史実を示そうとしたのである。

筆者はいま明治44年版の『水戸義公伝』3部を手もとにおいて、それらを比較してみると、そのうち2部は赤インクで、甚だ多数の書入れがしてある。進がこの本の改訂出版を志していたあとが歴然としている。しかし改訂出版は実現しなかったようである。順天堂大学所蔵本 No. 19088 で赤インクの書入れは誰れがなしたのか不明だが、偉い歴史家であったと感ぜられる。朱筆で書いた質問文が著者進の字で諸所に書かれているので、進がその歴史家に訂正を乞うたにちがいない。彼はこの光圀伝の完備にひじょうな熱意をもっていたのである。

進の郷土愛の精神は明治44年に常陸太田町に進徳幼稚園をつくり寄付したことでその片鱗がわかる。いまその幼稚園の庭に進の胸像が建っている。また同地の小学校には体育館をつくり寄付した。また茨城県立水戸中学校の講堂には進の書いた「堅忍力行」の4字が掲げられていた。今の水戸第一高校である。

筆者は『水戸義公伝』の第215ページに「公(光圀)茶の湯を好めども、数奇に流れ、器物の欲を生すべしとして、之を廃せり」とあるのに注目した。そして進の自伝『佐藤男爵』の第332ページにも進が初めは茶の湯を酷愛したが、後年全くこ

れを廃した。その理由はいわゆる茶人が真に風流を愛するものでなく、却って卑俗な心の人が多いこと、徒らに茶器骨董に心を凝らして果は要なき競争をするのを見て厭わしくなったため自然これから遠ざかったとある。義公伝研究の影響がここにはないとはいえない。

光圀が元禄3年(1690)に水戸藩主の地位を第3代の綱條にゆずり、隠居して水戸黄門と呼ばれ、翌4年より太田の西山荘で余生を送ったことも、進が明治42年ごろ順天堂の仕事を養子の達次郎に委せて、自らは麻生の別邸で悠々自適の生活を送ったことが若干の共通点を示すようである。もちろん江戸時代初期の御三家の一つである水戸藩主の光圀と明治時代の名医で順天堂主の男爵佐藤進とはいろいろの点で事情がちがっている。しかし進は深く水戸義公に傾倒して、それを欽慕するのあまり、その伝記を著わしてその完成に全力をあげたにちがいない。

『餐霞録』と『佐藤男爵』

進が古稀の年令に達したことを祝う盛大な宴会が、大正3年11月25日(彼の誕生日)に上野精養軒で開かれた。そのとき参会者一同に進の自伝といえる『佐藤男爵』と、進がいろいろの機会に書いた(一部は門人が進の仕事について書いた)記録集である『餐霞録』が配布された。どちらも編集兼発行者は谷紀三郎(号は江風)であり、共に非売品で同年11月23日の発行とある。谷江風は進の夫人志津子が校長をしていた女子美術学校の職員であったが、たびたび進夫妻をたずねて直話をきき、また古い記録を見せてもらい、この両書を作ったと思われる。いずれも力作であり『餐霞録』は本文606ページ、『佐藤男爵』は本文394ページで、合わせてちょうど一千ページに及ぶ大冊である。

筆者が佐進伝を編むのにこの2書がどれほどありがたかったか測り切れない。これまで進の自伝と称したのはこの『佐藤男爵』を指すのである。餐霞(さんか)とは漢和辞典をみると、霞を食べることで道家の修練術とある。進が霞力浦畔の別荘の地を霞力岡と称し、また餐霞荘とも称してい

たようである。多事多忙であった現職を退いて、霞を食べる仙人の心境にあることを意味するとおもふ。

『餐霞録』の内容は、(1)餐霞荘漫筆、(2)渡洋之記(明治2年のドイツへの旅行日記)、(3)李中堂治創記(明治28年下関にて李鴻章の負傷を治療する日記)、(4)滞広日記(日露戦争にて進が広島に滞在した日記)、(5)日露戦役医談(これは進の口述を毎日新聞社編集局の白井俊一が筆記し明治39年3月に山内英之助の発行したものの再録である)、(5a)復命書(明治37年11月、進より陸軍大臣寺内正毅にあてたもの)、(5b)回想録(日露戦争を主とし、進が経験した戊辰の戦から西南戦争、日清、日露戦争まで、戦死者、戦傷者、病者、病死者の数などを比較している。戊辰の戦の分は詳細が不明だが、普仏戦争におけるプロシア軍の戦死者、病死者の数が掲げられている)。

(6)至仁至徳の先帝陛下(明治天皇)、(7)最初の拝謁、(8)照憲皇太后陛下の御高德、(9)外科学史、(10)医学の変遷に就いて、(11)大久保(利通)公について、(12)愛岐震災見聞誌(高比良養次郎稿)の全部で14章から成っている。

『佐藤男爵』はやはり谷紀三郎が進および志津子夫人から聞いた直話を綴り、それを更に進が校閲したものという。また明治32年に博文館が発行した坪谷善四郎編の『医学博士佐藤進先生自伝』を大いに参考したとある。この『佐藤男爵』(大正3年)は進の自伝のほか、佐藤泰然、同じく尚中のことが載り、江戸時代末期の佐倉順天堂の塾生々活も描かれているので私どもにとり甚だ貴重である。

ここでは特に第21章の「男爵の嗜好」というのを調べてみる。進の趣味が多方面にわたっていて、医学の勉強一点ばりの人間でなかったことがよく感ぜられる。まず(その一)として「書画筆硯並に茶」のことがでている。和漢の名ある書画を集めて愛玩していたのみでなく、筆硯の類は一流の逸品を自ら所有し、折にふれ自ら筆をとり、書や画を揮毫した。じっさい順天堂歴代の院長のなかで彼ほど数多くの書を残した人はない。書道

は初め土肥樵石を師としたが、それよりも多く晋唐の古法帖など、古人の書について自ら学んだという。画は後に益田玉城に学んだが進は画よりも書を得意としたようで、今でも進の書は数多く所々に残っている。画はわりあい数が少ない。号を茶崖といった。初めは茶涯であつたらしい。いずれにせよお茶の水の意味とおもう。

茶の湯は川上宗順を師としたとのことで、初めは甚だ熱心であつたが、後に廃したことは前に述べた。(その二)は「義公伝の著述」とあるが、これは趣味というよりは前述のごとくりっぱな歴史研究である。(その三)は摂津大掾の浄瑠璃を甚だ好んで、この人と深い交わりをもっていたという。俳優では市川団十郎、尾上菊五郎を、また落語家の三遊亭円遊を大いにひいきにした。

(その四)は「謡曲と能楽」であり、進は日清戦争から戻った後に主として梅若万三郎を師として謡曲を学びはじめた。夫人も令息昇も一家そろってそれを稽古したとのことである。能楽にも大いに興味をもち、自ら仕舞を習っていた。また三須錦吾に鼓を習って「一時は謡と鼓とで殆んど虚日がないという有様であつた」とある。進じしんの言として「上流の人でも一家を外に花柳の巷に出入する者もあれば甚しきは博奕類似の事さへ試みる想である。自分は以外の事ぢゃと思ふ。それ等の為に身心を慰藉する積でありながら、却って身心を害するに至るのである。故に国家の上からいうも、一個人の上から言っても娯楽は選択を要する。其には今日幾多の娯楽中、優美にして高尚、紳士として恥づる所なく陽光の下白昼公然行い得るものは独り謡曲あるのみであると信ずる」とある。進が謡曲に深くうちこんだ理由がこれで知られる。

筆者らは近ごろ鼓の大家幸五郎氏に会って、氏が少年のとき師匠につれられて、駒込の佐藤邸をしばしば訪れたときの様子をきいた。幸氏の記憶では鼓は志津子夫人のほうが進よりも上手だったよつたという。進夫妻が親切にしてくれたが、少年の五郎氏にはかなり威圧感があつたらしい。いま順天堂大学の理事長室には進夫妻が用いたり

っぱな鼓 5 個が蔵されており、幸氏の鑑定では小破しているものを除き大部分はそのまま今も使用可能であるという。進夫妻が幸流の鼓を習っていたことは確かである。

(その五)として「読書と吟詠」があげられている。進しんが「餐霞荘漫録」の中で自分は青年のときは医学書のみを読み、他書を顧みる閑がなかったが、近年は有益にして且つ趣味多き本が続々と刊行されたので、「余の如き晩年に至りては、新聞雑誌を始めとして、宗教・哲学・歴史・伝記及び詩歌狂句の末に至るまで、手に触るる所見ずと云ふことなし」と述べている。晩年には大いに読書し、宗教や哲学書まであさったことが知られる。歴史伝記については、前述の『水戸義公伝』が彼の深い造詣を示している。

また、漢詩・和歌・俳句・狂句・俗謡・狂歌に分けて、彼の作品がこの『佐藤男爵』に載っている。才藻溢るるが如しと編者の谷江風は書いてるが、全くその通りである。

『名流華翰』と『餐霞餘録』

佐藤進の伝を書くにあたって、甚だありがたいことは進が筆まめであって、晩年に自らの回顧録をよく筆にし、それを出版して残してくれたことである。

前に述べた二書が進の古稀を迎えての出版物であるが、その翌大正 4 年の末に『名流華翰』と題して進が諸名士から受けとった手紙を活字にして公けにした。編集兼発行者は山内英之助であり非売品である。本文は 242 ページにわたる。子巻 14 名、丑巻(尾濃震災) 9 名、寅巻(日清事件) 15 名、卯巻(日露事件) 15 名、辰巻(日露事件) 10 名、巳巻(韓国経営) 13 名、甲巻 15 名、乙巻 14 名、丙巻 19 名、丁巻 14 名、戊巻 11 名、癸巻 25 名、別巻 21 名で、合わせて 195 名の有名人書翰集である。もっとも癸巻の佐藤泰然の分をみると、ドイツ留学中の進にあてた手紙の他に、泰然から在米の佐藤百太郎(尚中の息子で進の義弟)にあてたものが 2 通追加されている。また佐藤尚中の書翰は宮原様侍史とあり、必ずしも全部が進あてのもので

はない。

この尚中の手紙は、何年の 4 月 25 日か判らないが、尚中が大学東校にいた間のものかとおもう。宮原氏から河野某の就職あるいは入学について内々の頼みを受けて、自分には職違いのことで推薦はできないと断わる手紙である。「……元より至愚の小生職違いの場へ発言いたし是より已を得ざる事情を發し、不等の医生を撰挙候よう相成候ては第一上に対し恐れ入り候ゆえ深く相慎しみ罷り在り候……」とあり、すこぶる慎重であり、情実に捉われない公平な態度を示している。

また松本順、緒方惟準、林紀の手紙が茶涯あてであり、茶崖の号は初め茶涯であったことを裏付けている。

岩佐純が明治 4 年 9 月 3 日付で在独の進あてに送った手紙は興味ぶかい。「……両教師も八月上浣来朝に相成り追々貴地の御模様も承り候処、申す迄なく盛大の至り更に無詞。去りながら追々は貴兄さま御奮発を以て各国と駢立いたし候様相成り度し。去りながら未だ何一カ条と申し相運び候ことも之なく、只々汗顔望洋の気味之あり慨歎の外之なし」と最初のドイツ人教師ミュレル、ホフマンが来日して間もないときの東京の医学校(當時は東校と称した)の状況を記して前途望洋の歎ありとしている。

続いて「此上は貴兄さまの御任に之あり候はば、他年錦衣の日を刮目佇望罷りあり候」と進がドイツ留学の成果を十分に収めて帰国するのを刮目して待つとある。「両教師も先日来開業、日々孜々教授いたし居り候。去りながら兩人にてはさぞさぞ苦力の事と察し入り候」とミュレル、ホフマン兩人も大変な努力をしているとある。

「舜海先生(尚中)にも先年来格別の恩遇を蒙り……御出京以来は日々御厄介に相成り、格別の御尽力を以て東校も盛に相成り、一方ならず御苦力深く道のため謝し奉り候」と、大学大博士の尚中が東校の発展に大いに尽力し、岩佐も大変にお世話になっているとある。また「留学生何れも御厄介に相成り、幸に先輩御出に相成り居り候ゆえ格別幸福の至りと存じ奉り候。尚此上万々御引廻

し相願い候。殊に舎弟不才情性のものにて……」とあるので、明治3年に日本政府からドイツ留学を命ぜられた連中がその前年に渡航した進からいろいろと便宜を得たことが推測されるし、その留学生の一人である純の弟のことを宜しく頼むと書いている。

明治初年の東校や進を中心とした日独間の医学の状況がこの手紙である程度わかるのである。進がドイツ医学を取り入れる先鋒に立っていた。この書翰集は進の自伝よりもいっそう生まの資料としておもしろいが、ここではこれ以上立ち入らない。

つぎに『餐霞餘録』は大正8年10月の自家出版で、編集兼発行者は前者と同じく山内英之助である。巻頭の自叙は「大正八年己未初秋霞浦別墅に於て、七十五翁佐藤進」とあり、麻生の別邸で書いたことがわかる。自伝を更に補ったもので、自叙の中に餐霞録を大正3年に出してから「いつしか五年の星霜は恰かも夢の間に過ぎぬ、秋の夜のつれづれ去りにし事ども想い回らせば、当時ものせし事の端の中にも書き漏らせしと覚しく、又後に思い出せしこともあれば……」と前に発表した自伝の補遺であることが知られる。

この本ができる前の大正8年3月に志津子夫人は歿したので、麻生の別荘でも彼は淋しい日々を送っていたかとおもう。夫人が校長をしていた女子美術学校の校長を進じしが引受けていた。その翌大正9年に進は順天堂の院長の席を養子の佐藤達次郎に譲ったのである。

進の逝去と順天堂研究所の発足

大正10年(1921)7月25日、日本医学界の巨星であった佐藤進は、数え年77才で遂に歿した。盛大な葬儀が営まれて、墓は駒込吉祥寺に建てられた。いま吉祥寺の門を入り本堂に向って進むとすぐ右側の一面に進と夫人の墓が一基づつ並んで立っている。

進が歿して間もなく同年の9月に順天堂研究所がいまの10号館(新館)の位置に落成し、額田晋を所長として機能がはじまった。鉄筋コンクリー

ト2階建、150坪、地下室を合わせて25室の当時としてはりっぱな建物であり、後に順天堂大学医学部6号館とよばれ、今の新館をつくるに当り、昭和45年に壊されたのである。この研究所はもとと佐藤進の古稀を祝う意味で作られたのである。その目的は順天堂医院在職者の研究を助長し、諸般の臨床的問題を生理学・病理学・化学などの諸方面から探求することであった。しかしこの研究所ができて2年後の大正12年(1923)9月1日関東大震災に際し順天堂医院が全焼した。この研究所は焼けずに残ったので、順天堂の診療業務がここで続けられることになり、研究所としての機能は短い期間しか果されなかった。

進が営々と築きあげた順天堂が大地震により、灰燼に帰することをもちろん彼は予想しなかったであろう。そしてまた、彼の長寿を祝う意味で作られた鉄筋コンクリートの建物が、大震災に堪えて残り順天堂の業務がそこで続けられることも想像しなかったにちがいない。

大正11年10月発行の『順天堂医事研究会雑誌』第565号は「故院長佐藤進先生追悼号」として、子爵石黒忠憲をはじめ多くの人々の追悼文が載っているが、筆者は其中で特に福田安次郎(元福田保院長の父、現福田芳郎教授の祖父)の文は内容が甚だすぐれていることに注目した。その全文を掲げたいが、紙数に余裕がないので一部だけを抜萃する。

「霞ヶ岡別墅ハ男爵が母堂ノ出身タル常陸霞湖々畔ノ麻生町ニ営マレシモノニシテ、一眸千里瞰下ニ霞ヶ浦ヲ展望スル一高丘地デアル。地ノ広サ五千坪、……後裏ノ平園ニハ水戸義公ノ遺風ヲ継ギテ梅樹千株を植附ケ、一ツノ梅林ト為シ、……マタ男爵ノ書齋ハ西山公ノ書屋ニ擬シ、……真ニ天下無比ノ名勝地タリ」でその文が初まる。進が水戸光圀の遺風を慕い、その西山荘に擬してこの別邸を作っていたことがわかる。「余ハ三十余年ノ久シキ男爵ノ知遇ヲ厚フセシ一人ニシテ、特ニ別墅ニ出入シテ有形ニ無形ニ其風貌ニ接シ、其恩ニ浴スルコト甚大ナルモノアリ。従ッテ感ズル処他ノ人ヨリ猶一層深シ」とある。30余年の交わり

というので、進が麻生に別荘を求めた明治36年より更に10年以上も前から知っていたことになる。福田安次郎は麻生で医を営み、その業が盛んであったことは今も麻生に残るそのりっぱな旧宅からも想像できる。その人がすでに出版された進の自伝の幾つかをみても、なお「未ダ其ノ機微ノ間ニ処スル遺徳ノ世ニ知ラザルヲ遺憾トスル」というのだから、この一文は必読に値いする。

そして、①「義公ノ遺徳ヲ慕ヒテ風致ト自然ヲ愛ス」と題して「霞ヶ岡別墅ヲ東へ二十余丁、八国台ト称スル山ガアル……」。そこは国有地だったが進が買いとって、新たに養神台と命名し「荊棘ヲ刈ツテ小径ヲ修メ、亭ヲ建テ、榻ヲ設ケ、之ヲ開放シテ衆人ノ自由ニ園内ニ入リテ吟詩朗詠、嬉々トシテ受賞スルヲ許セリ」とある。進が麻生城趾を買いとって自らの別荘とし、また養神台を整えて、一般に公開したのも自然を守るためであって、他の人々が土地を買い占めて樹木を伐採し、自然を害することに進はつよく反対したと、次の②「自然と人生」の題下でも述べている。

③「簡易ナル生活ハ健康ヲ増進シ矯奢ヲ戒シム」では進の生活が簡単であって、複雑を好まず、食事の如きは淡泊のもの殊に蔬菜類を好んだ。それも進自ら栽培した野菜を食べ、酒は潮来成井醸造の富国を用いた。進は「美味必ラズシモ滋養物ナ

ラズ、殊ニ肉類ノ如キ蛋白質富饒ノ品ニシテ、一旦不消化ニ了ハリ、腸内ニテ腐敗醗酵スル如キコトアラソカ、恐ルベキ有毒素ヲ醸成シテ血中ニ吸収シ、全身ノ諸臓器ヲ中毒セシムルナラン」と述べたようで、少くとも晩年の進は菜食主義者であったと感ぜられる。

④「規律ト礼節アル起居」、⑤「仏閣ヲ弔ヒ孝子ノ茅蘆ヲ訪ヌ」も面白いが、つまり水戸黄門（義公光圀）のやり方を範としたごとくである。福田安次郎氏の追悼文の最後は、⑥「名利ヲ厭フテ実ヲ尊ブ」の題で、その終りに「古来ヨリ医ハ仁術ナリ。苦吟奄息ノ窮者ヲ慰ムハ医ノ生命ナリ。然ルニ近時医術ニ努ムル傍ラ、政治ニ熱中シ、投機事業ニ執掌スル等、野心利慾ノ蟠マリアリテハ到底仁術ノ道ヲ果スヤ難シ」。順天堂の主義方針はみだりに建築の美を競い、……世人の視線を惹いて患者のより多く来ることを欲するのではない。

「真ニ精新ナル学理ト精察ナル経験トヲ以テ、胸奥ヨリ発露セル愍憐ノ情ヲ以テ、救済スルノ側陰ノ心ヲ以テ臨マザル可カラザルコト」を主旨としているとある。病院の一角に巨万の資を投じて完全無欠の研究室を新設したのは、この精神の現われであるという。進の歿後まもなく開かれた順天堂研究所を指すのである。

（佐藤進伝 終り）